

# 舞踊家望月則彦

—バレエに捧げたいのち—

## 堀内 充

### はじめに

大阪芸術大学大学院教授望月則彦先生が2013年12月にご逝去されました。2004年に本学舞台芸術学科に着任され、大学院芸術研究科芸術制作専攻舞台研究領域で教鞭をとられ、舞台芸術学科舞踊コースでも指導していただき、大学内でも積極的に舞踊作品を学生のために創作され、学内外で上演発表し、大学の教育と発展に尽力されました。

先生はわが国の舞踊界においても署名な振付家でもおられ、東京の名門・谷桃子バレエ団の芸術監督や京都府立府民ホールの舞踊芸術監督を務められ、多くのバレエ作品を残しました。なかでも新国立劇場バレエ団に委嘱されたバレエ「舞姫」は高い評価を得て橘秋子特別賞を受賞されました。大学はもとより、いずれも在職中の最中で亡くなられ、まだまだ芸術家として教育者として活躍を期待されていただけに残念でなりません。先生が舞踊界に送り出した舞踊作品は積極的に本学でも出品して下さったこともあり、大学で発表していただいた作品を中心に振り返らせていただきます。

### 1. 振付家望月則彦のバレエに対する主観

望月則彦先生の多くの舞踊作品はストーリーを包含するドラマティックバレエであり、人間の姿勢や愛憎などの心理描写に焦点をあてていたもので、言葉では言い表せられない感情を舞踊表現で観客に伝えようと腐心しておられました。バレエ作品の数々の名作の再構築、改訂振付したものからはじ

まり、多くのシェイクスピア作品を舞踊化したもの、またオペラになったギリシャ神話などの題材をもとにしたものや、そしてはたや森鷗外や三島由紀夫などの文学作品もとにしてつくられたものまで先生が舞踊創作された作品は枚挙にいとまがありません。特筆することは、舞踊作品は台本はあってもそれを表現する音楽がなければ出来上がりません。バレエはストーリーのあるものとなないものがあり、ストーリーのないもので交響曲のような音楽を舞踊で表現するものをシンフォニックバレエとよびますが、台本のあるものはそれにしかなかった音楽も探したりつくったりしなければならぬため、他ジャンルのことも理解しなければならず、そう考えても望月先生はたいへんな勉強家であったこともうなずけるでしょう。また、台本があってもただそれだけを言葉から舞踊に置きかえるだけでは、芸術作品として成立しません。原作や台本をとおしていかにも演出し、作家として自身の「眼」を生かした主題をつくりあげることが大切なのです。作品を発表する際に、作品に向けたメッセージをパンフレットに載せられることもあり、望月先生はそこに舞踊の意味と価値を表していました。

### 2. 大阪芸術大学・舞台芸術学科公演で発表した舞踊作品の代表作

本学で望月則彦先生ご自身の作品を舞台芸術学科舞踊コース学生のために発表された作品を、同じ舞踊振付家という立場からみた舞踊評論を交えて紹介します。

### ①「オンディーヌ」(2010年度発表作品)

フケーの幻想小説“ウンディーネ”原作によるバレエ作品で、英国ロイヤルバレエ団が1958年に上演されているが、音楽や舞踊台本設定も全て望月則彦先生がご自身で選ばれたオリジナル作品として発表された。水の精オンディーヌと騎士ハンスの悲恋を描いた作品で、4分におよぶ長編で、本学で発表された作品の中ではもっとも長い上演時間であった。

作品はオンディーヌ、ハンス、ベルタ、水界の王といった劇中の登場人物を配し、ストーリーをおさえながらクロス(群舞)が織りなす美しいフォーメーションやパとよばれるステップを随所に散らばせながら展開するのが特徴で、舞台芸術学科美術コース生制作による舞台装置も印象的で、大中小の水晶が幾つも吊るされ、クリスタルな輝きを放ち、それが幻想的かつ現代的感覚にも感じられて作品の芸術性を一層高めていた。主人公のオンディーヌが登場から最後まで、どこか心に影を持たせたような舞踊手法を展開させそれが統一感ある色彩をつくりあげ、視覚的にも悲劇性を緩やかな心地よいテンポで描いていたのが秀逸であった。主要な役を演じた細山田愛美、塩山紗也加、道場紀依、石川飛鳥、井上雄介といった出演者全員が好演していたことも付け加えておく。

### ②「じゅりえっと」(2008年度発表作品)

ロミオとジュリエットはシェイクスピアの代表作で演劇のみならずバレエでも大変人気の高い作品である。ふつうバレエでは音楽はプロコフィエフの同名の名曲が使われることが多いが、望月則彦版は、当時演奏用としてつくられたチャイコフスキー作曲のものを選んで振付されたのがまず異色であった。また作品タイトルも変え、本人になぜ代えたのかと聞いたことはなかったのだが、悲劇の愛ではなく純真そのものであったジュリエットの姿を、またひらがなにすることによって時代や状況設定も断定せずに、日本を含めた身近にいる少女として、多角的に彷彿させたかったのかもしれない。

作品はシェイクスピアの台本のような構成はなく、登場人物もジュリエットやロミオ、マキューシオ、乳母といった人物に限られている。また場面設定も抽象的で有名なバルコニーのシー

ンと断定できるところもない。まるで人間が回顧する時のように、展開する場面は断片的でフラッシュバックしているような感じであった。そして何よりも圧巻だったのは力強く、瞬発力溢れるクロスたちの踊りであった。人は自分にとって身近で大切なひとを失った時、印象深いものから回顧するもので、この作品はトータルにみるとまさにジュリエットを想いながらつくられていたのではないかと。つまり望月先生ご自身が愛する女性、愛するバレエに捧げる日々そのものを想いながらこの作品創作に注がれたのではないだろうか。これは大切なことでこの姿勢こそが芸術家の姿であることを私や学生に示してくれた気がするのである。

### ③「カルメン」(2011年度発表作品)

メリメの原作をビゼーが作曲して「カルメン」は世界でもっとも親しまれているオペラとなったが、バレエでも多くの振付家たちが世界各地で振付し、発表している。ジプシーの血に狂う悪の花、スペインの情熱を象徴するカルメン。純朴な青年ドン・ホセは彼女と出会ったために運命を狂わせる。このふたりに焦点を絞ってこの作品は展開された。ミカエラやエスカミーリョといったオペラの定番となった人物は登場しない。その代わりやはりここでも男女の群舞のクロスが大活躍する。ミカエラが登場しているようなのかなかな情景もあれば、闘牛を思わせるスピーディーな足技を絡ませパを連続させた場面も盛り込んであった。ホセ役の今井大輔のダイナミックで甘味な踊り、斎藤綾子の柔軟で多彩な表現力を引き出したのも振付家の力によるものといっても過言ではあるまい。これらのように望月先生は舞踊を志す学生の才能を伸ばすためにも作品構成を考え、芸術作品をつくられていたのである。オペラでは最後は目を覆わんばかりの結末で終わるが、ここではカルメンの息を止めてしまいがらもホセが夜空いっばいに広がる星々を見上げながら目をゆっくり閉じていくシーンで幕となる。このホセに対する親のような気持ちが教育者望月則彦の側面でもあったのかもしれない。

### ④「スペイン交響曲」(2012年度発表作品)

ストーリーあるドラマティックバレエを得意ジャンルとする望月先生が、めずらしく本学でもシンフォニックバレエ作品を発表していただいた作品がフランス人音楽家エドゥアール・ラロによって作曲された「スペイン交響曲」である。名手サラサーテのためにつくられたヴァイオリン協奏曲で、美しいヴァイオリンの独奏の響きと交響曲が融合された音楽の視覚化に取り組み、テンポが速く、高度なバレエテクニックを織り込ませた振付は見応えがあった。先生は自身の舞踊技術をわかりやすく学生に理解を図るために、バレエ作品でもポアントシューズを履かせずにあえてさきの柔らかいバレエシューズを着用させることが多かったがこの作品には女性全員にポアントシューズを用いた。リーディングダンサーを務めた山田優帆、石川遠永那、永森明穂といった出演者の技術と表現力は高く、またカドリーユを任命されたダンサーたちのアンサンブルも見事なハーモニーで複合的難易度の高い振付をこなし、振付家の期待に応えていた。バレエダンサーでもっとも大事な姿勢は日々の鍛錬であり、この作品はまさにその姿勢がなければ踊り演じることが不可能なほどのレヴェルであったし、この作品をとおして厳しい舞踊の世界を学生たちに教え込ませる信念が見られた。

#### ⑤「誘惑者」(2013年度発表作品)

ストラヴィンスキーの“春の祭典”を本学舞踊コースに振付していただくことを望月先生から直接お聞きしたとき、大げさではなく跳び上がってしまった。あのバレエ史に刻まれている名曲である。とても教育向けにつくることは不可能なほどの高難度な音楽ではたして本当に上演出来るのだろうかという心配も脳裏をよぎったが、今回出演する舞踊コース生のレヴェルも高く、また先生ご自身も学生たちにとっても良い勉強になると熱く語られていたこともあり、期待感いっぱいにてぜひお願いしますと申し上げた。そのように心から楽しみにしていた上演であったが、残念ながらそれを待たずに望月先生は本番上演直前に帰らぬ人となった。本学舞台芸術学科舞踊コース創設以降もっとも悲しみに暮れた日々を送りながら稽古をし、本番を迎えたのである。

本作はこのように未完成の部分が残されていたが、望月先

生の愛弟子で、大学院博士課程を修了した河邊こずえ本学非常勤講師が、振付開始当初から助手を務めていたこともあり、先生の遺志を継ぎ作品を完成させた。作品の主題はいわゆる祭りの生け贄をえらぶ儀式ではなく、モーリス・ベジャールのように舞踊作家独自のメッセージを持ち、この作品でも旧約聖書創世記からヒントを得て、蛇にそそのかされ禁断の木の実を食べてしまうイブの姿を表している。つまり音楽の視覚化を目指しながら自身の設定した主題に迫るわけで、これほど難易度の高い創作課程に出会う機会はプロフェッショナルでもなかなかないだろう。創作現場は望月先生の病状もあり毎回密度が高く、緊張感ある中で行われただけあり、ストラヴィンスキーの楽譜の上にダンスのグラフが重なっているような細かいパ、ステップで埋めつくされていた。しかしこれこそが最も望んでいたことであり、この場面を観た瞬間胸が熱くなった。イブ役を務めた大矢茉莉奈は作品の冒頭場面から渾身の舞踊表現をみせ、観客の視線を鷲掴みにした。古道貴大のアダムも落ち着きあるムーブメントで作品を導いていた。そして何よりも出演者全員が望月先生に捧げる想いで全力投球で激しいダンスを踊り抜き、観客からも大きな拍手が鳴り止まらなかったことを報告したい。この作品に出演した彼ら彼女たちのこの時の素晴らしい熱演はバレエにいのちを捧げた証でもある。そしてこの姿勢を舞踊家をやめるその日まで貫くことこそが舞踊家望月則彦先生の最後のメッセージであった気がしてならないのである。



誘惑者

### 3. 望月則彦先生の大学院における教育

2004年度より本学大学院教授として教壇に立ち、その後多くの舞踊家を育てられました。博士課程および修士課程を終えた教え子のほとんどは現在も舞踊芸術に携わった活動を続けており、その中でも内外での活躍後現在長尾奈美と河邊こずえの2名が本学教員として、また嵯峨根結実と中東唯の2名が本学副手として、それぞれ勤務しながら舞踊活躍を続けています。あまり知られていないのですが、舞踊を専攻出来る大学院芸術研究科はわが国でも数大学院しかなく、特に関西では本学のみです。だからこそ海外では舞踊のドクターやマスターになれると芸術家としての社会的地位が上がるため、周辺諸国のアジアからも注目され、韓国や中国からの留学生が多いのはそのためです。そんな価値ある研究科の中で9年間もの長いあいだ望月先生は舞踊分野をおひとりで大学院に尽力されたのです。

#### おわりに

望月先生とは舞踊界では、先輩、後輩ともいえる間柄でありました。この芸術の世界では人にいかに影響を与える作品を輩出できるか、活動できるかが勝負のようなところもあり、そんな間柄でも芸術家である限り常にお互いを牽制し合う側面もあります。しかしながら先生は一切そんな素振りを見せたことはなく、大学外でもむしろ支えて下さいました。一匹狼の世界でもあり、唯一の職場の同僚だったからかもしれませんが。同じ振付家として学ばせていただいたことがあります。舞踊コースの年間カリキュラムはすべて私が行っており、毎年々に望月先生に作品を依頼する際、「毎年で申し訳ありませんが今年もよろしく願い致します」と申し上げるのですが、いつもひとつ返事で笑顔で答えて下さり、9年間一度も辛いそぶりをみせなかったことです。生みの苦しみとはよく言いますが、芸術はひとりで立ち向かうものだという事を教えて下さいました。この遺志を引き継いで、今後も変わらずに大学院芸術研究科舞台

領域および、舞台芸術学科舞踊コースにおける教育と研究に邁進していく所存です。ここにあらためてご冥福をお祈り申し上げます。

#### 望月則彦 略歴

谷桃子、アンドレ・グレゴルスキー、マダム・ノラ、マダム・ダルバッシュに師事。

1977年、1978年日本バレエ協会「夏期定期公演」にて振付賞を連続受賞。

1980年文化庁派遣芸術家在外研修員として1年間アメリカに留学。帰国後、日本バレエ協会主催公演やローザンヌ国際コンクールでの受賞者の創作作品も多数創作。

1987年より1997年まで10年間にわたりスイスのサン・ガーレン州立劇場付属バレエ団にて依頼作品を創作。

谷桃子バレエ団自主公演で創作した「テス」が音楽新聞社の1998年度邦人舞踊作品ベスト3に選ばれる。

2000年5月に新国立劇場にて依頼作品「舞姫」を創作。同年橘秋子賞特別賞を受賞。

近年では谷桃子バレエ団自主公演全作品の演出補佐を担当する。また韓国、天安第1回国際ダンスフェスティバル、第8回大邱国際ダンスフェスティバルに招待され創作作品を発表。

谷桃子バレエ団創立60周年記念公演での創作作品「レ・ミゼラブル」再演が平成22年度第65回文化庁芸術祭舞踊部門大賞を受賞。大阪芸術大学大学院教授。

2011年1月谷桃子バレエ団芸術監督に就任。

2013年12月11日逝去 享年67